

ぽつぽのお手帳

鈴木三重吉

青空文庫

すゞ子のぼつぼは、二人とも小さなく赤いお手帳をもつてゐます。この二人は、「黒」よりもにやア〜よりも、「君」^{きみ}よりも、だれよりも一ばん早くから、すゞ子のおあひてをしてゐるのです。

一ばんはじめ、或冬^{ある}の、氷のはつてゐる寒い日に、二だいの大きな荷馬車がお荷物をついで、ぼつぼたちのながく住んでゐた村から、町の方へ、こと〜出ていきました。ぼつぼは、あのまゝかごにはいつて、その二ばんめの荷馬車の、一ばんうしろに乘せられてゐました。二人は、一たいどこへいくのだらうと言ふやうに、しきりにきよと〜くびをうごかしてゐました。お父さまはそのときぼつぼに言ひました。

「二人ともおとなしくして乗つてお出^いで。こんどは海の見えるお家^{うち}へいくんですよ。」と言ひました。

「そして、そのお家^{うち}へ、小ちやなすゞちゃんが生れて来るのですよ。」と、小石川^{こいしかは}のお祖母^{ばあ}ちやまがそつと二人におつしやいました。ぼつぼは、

「お祖母さま、お祖母さま、そのすぐちやんといふのはだれでございます。」と聞きました。

お母さまは、だまつて、たゞかるくわらひながら、みんなと一しよに車に乗りました。ぼつぽは、それからこんどのお家へつきました。そのじぶんには、すぐ子の曾祖母は、まだ玉木の大叔母ちやんのところいらつしやいました。あき子叔母ちやんもまだ来てゐませんでした。おうちには、千代といふ小さな女中がゐました。

ぼつぽは、せんとおなじやうに、お部屋のそとの、ガラス戸のところにおかれました。このお家は、おもてからはいつて来ると、たゞの平家でしたけれど、上へ上つて、がらす戸のところへいつて見ると、そのお部屋のま下が広いおだいどころで、そこからはお部屋はちようど二階のやうになつて、つき出てゐました。

そのお部屋のぢき目のまへは砂地でした。そして、そのすぐきぎが海でした。ぼつぽはガラス戸の中から、どんよりした青黒い海を、びつくりして見てゐました。まつ正面の、ずつと向うの方には、小さな赤い浮標がかすかに見えてゐました。

その向うを、黄色いマストをした、黒い蒸汽船が、長い烟をはいて、横向きにとほつていきました。二人のぼつぽは、

「おやく、あんな大きな船が来た。お、早い。ぽっぽウ、ぽっぽウ。」とおほさわぎをしました。

お母さまはこのお部屋へおこたをこしらへて、小さなすゞちゃんが生まれてくるのをまつてみました。そして千代と二人ですゞちゃんの赤いおべゝをぬひました。

暗い冬はそれからまだながくつゞきました。昼のうちは、おもてのじくじくした往来を、お馬や荷車やいろゝの人がとほりました。それから、お向ひのうどんやで、機械をまはすのが、ごとくごとくと聞えました。

しかし夜になると、あたりはすっかり穴の中のやうにひっそりとなつて、たゞ、海がびたゞと鳴るよりほかには、何の音も聞えませんでした。

暗い海の中には、星のやうなあかりがたつた一つ、ちかりくと消えたりとぼつたりしました。それは、昼に赤く見えてゐた、あの浮標うきの上にとぼるあかりでした。

ぽっぽは、そんな晩には、さびしさうに、夜でも、

「ぽっぽウ、ぽっぽウ。」となきながら、

「すゞ子ちゃんはまだおうまれにならないのですか。いつでせう、いつでせう。」と聞きました。

二

そのうちに、だんくくと五月が来ました。海の空もはれ／＼とまつ青さをに光つて来ました。

お母さまは、ネルの着ものに、青いこうもりをさして、千代ちよをつれて、そこいらへ買ひものにいきなぞしました。

往来には、もういつの間にか、つばめが、海の向うから来て、すい／＼とかけちがつてゐました。電信の針金にもどつさりとまつてゐました。

お父さまは、すゞちゃんはいつ生れるのでせうねと、よく、小石川のお祖母ばあちやまとも話し／＼しました。

お家のちかくには、高井たかあさんのおばあさまといふ、それは／＼よいおばあちやまがいらつしやいました。そのおばあちやまが、とき／＼おみやをもつていらしつて、小石川のお祖母ちやまとお二人で、早くすゞちゃんが生まれるやうに、いのつて下さいました。

すると、六月の或晩あるでした。お母さまには、あすはすぐちやんが生れるといふことがわかりました。お父さまも、それはよろこんで、すぐに小石川のお祖母ちやまに来ていたゞきました。

でも、ぽつぽにだけは、みんなだまつてゐました。ぽつぽがよろこんで、あんまりおほさわぎをするとうるさいから、あとでそつと見せてやることにしたのでした。

その晩お母さまは、すぐちやんの寝る小さな赤いおふとんをちやんとしいて、そのそばへやすみました。

お父さまがあくる朝日をさまして見ますと、ちやんとすぐちやんが生まれてゐました。まつ赤かなお顔をした、小さい赤ん坊のすぐちやんは、一人で赤いおふとんの中に、すや／＼とねてゐました。お父さまは、よろこんで、

「お祖母さま、小さなすぐちやんが生れて来ましたよ。」と言つてよびました。お祖母ちやまは、かけていらしつて、

「あら／＼かはい、すぐちやんね。」と言つて、それは／＼およろこびになりました。すぐちやんはそれからしばらくたつて、はじめてお母さまにお乳をもらひました。

すぐちやんは、とき／＼「おぎア／＼」と泣きました。それから、「おふんにやい／＼

「と言ふやうにも泣きました。

ぼつぽは、はじめてすゞちやんの泣き声を聞くと、

「あれはだれでせう。ぽっぽウ、ぽっぽウ。」と、しきりにお父さまに聞きました。お父さまは、

「あれはすゞちやんだよ。こんど生れた赤ちやんだよ。」と言ひました。すると、ぼつぽは、よろこんで、

「おやさうですか。」と、ぱたくおほさわぎをしました。そして、

「早く見せて下さい。早く〜。」と二人でねだりました。

しかし、すゞちやんは、まだたうぶんは、そつとねかせておかなければならないので、

ぼつぽのところへつれていくわけにはいきませんでした。

ぼつぽは、まいにち〜、

「どうぞすゞちやんを見せて下さい。早く見せて下さい。」と言つて、かはる／＼／＼ねだりました。それで或日^{ある}お父さまは、すゞ子をそつと、おふとんにくるんで、ぼつぽのかごのまへにつれていきました。そして、

「すゞちやん〜、ごらん下さい。これがおまいのぼつぽだよ。」と言ひました。ぼつぽ

は、

「すゞ子ちゃんく〜こんちは。」

「すゞ子ちゃん私もあたしこんちは。」と、それはく〜おほよろこびでかう言ひました。

でも、まだ小ちやなすゞちゃんは、まぶしさうに目をつぶつて、おぎア〜といふきりで、ぼつぼを見ようともしませんでした。すゞちゃんは、たとへそのとき目をあけても、まだ、ぼつぼどころか、お父さまもお母さまも、なんにも見えなかつたのでした。だれでも小さなときは、目があつても見えないし、お手があつても、かたくちぢめて、ひつこめてゐるだけです。ちようど、足があつても、大きくなるまではあるけないのとおんなじです。

そのうちに、だんく〜と暑い八月が来しました。海はぎらく〜と、ブリキを張つたやうにまぶしく光つて来ました。すゞちゃんは、昼でも、小さなおかやの中になてゐました。

お母さまは、お部屋の鏡だんすのふちから、ねてゐるすゞちゃんの目のま上へ横に麻糸をわたして、こちらの柱のくぎへく〜りつけました。そして、赤いちりめんのひもの両はしに、小さな銀の鈴をつけて、それをその糸へつるしました。

すゞちゃんは、目がさめて、かやをどけてもらふと、黒い、きれいな目をあけて、その

赤いひもをぢいつと見てゐました。お母さまはとき／＼立つて、そのひもをこちらの方へ少しひいて見ました。

さうすると、すぐちやんの黒い目は、すぐに、はずかひにこちらの方を見ました。こんどは向うへやると、すぐちやんはまた黒目をうごかして、そちらの方を見ました。鈴はひもがうごくたんびにりん／＼となりました。お母さまは、

「まあ、ちやんと見えるのですね。」と言つて、うれしさうに笑ひました。お父さまは、こちらのいすにかけて見てゐました。お部屋の三方には、まつ白な、うすいカーテンがかゝつてゐました。その中に、すぐちやんの着てゐる赤いおべと、つるした赤いひもとが、きわだつてまつ赤に見えました。

三

お父さまは、それからまた或日、すぐちやんを、ぼつぽのまへへだいていきました。ぼつぽはよろこんで、

「すゞ子ちゃん、すゞ子ちゃん、こんちは。ぽっぽウ、ぽっぽウ。」と言つて、おじぎを
しました。

お父さまは、

「こつちよく、すゞちゃん。こつちをごらんなさい。」と言ひながら、すゞちゃんをか
ごのまへにすゑるやうにして、ぽっぽを見せようと思いました。しかし、すゞちゃんは、片
手をかためてしやぶりながら、ちがつた方を向いたきり、いくらをしへても、ちつともぽ
っぽを見ようとはしませんでした。ぽっぽは、

「まあ、まだくお小さいんですね。いつになったら、すゞちゃんが、ぽっぽやおつし
やるでせうね。」と、さも、まちどほしさうにかう言ひました。お母さまは、

「ほんとにいつのことでせうね。」と言ひながら、お乳の時間が来たので、すゞ子をおひ
ざにとりました。

「なに、ぢきですよ。今にすゞちゃんが一人で、ぽっぽのところへ来るやうになりますよ
」。

ちようどいらしつてゐたお祖母ぼあさまは、かうおつしやりながら、お乳をいたゞいてゐる
すゞちゃんの、黒い髪の毛をおなでになりました。

「あゝ、ぼつぽに、いゝものを上げてよ。」と、お母さまは、ふと思ひ出したやうに、帯の間から、小さな赤いお手帳を出してぼつぽにわたしました。

お父さまとお母さまとは、いつもすゞちやんが早く大きくなつてくれることばかりまつてゐました。ぼつぽも、そのことばかり言つてまつてゐました。

その十一月に、ぼつぽは、また、すゞちやんや、みんなと一しよに、ちがつた町の方へ遠く引つこしました。それは、ちか／＼に玉木たまきの大叔母おばあちやんが、はる／＼あばあ曾祖母おばあをつれて、すゞちやんを見に来て下さるからでした。そして、あき子叔母おばあちやんもお家うちの人になるので、すゞちやんの生れたお家うちではせまくてこまるからでした。

すゞちやんは、とき／＼あき子叔母おばあちやんのおひぎにだかれて、ぼつぽのかごのところへいきました。ぼつぽはこちらのお家うちでもまたガラス戸の中へおかれてゐました。すゞちやんは、ぼつぽのかごのわきに立つちをさせてもらふと、ちようどお口がふちのところへ来ました。すると、すゞちやんはいつの間にか、ちゆツくと、ふちをしやぶつてゐました。それから、お手てにもつてゐるがらく／＼をふりました。

「まア、すゞ子ちやんは、先せんから見ると、ずるぶんおほきくおなりになりましたね。」
ぼつぽはかう言つて、叔母ちやんとお話をしました。

それからまた寒い冬が来ました。その冬があげると、すゞちゃんはそろ／＼はひ／＼をし出しました。それからまた青い八月がまはつて来ました。すゞちゃんは、歩いてはたふれ、歩いてはたふれして、よち／＼ともう十足とあしばかりあるけるやうになつてみました。そのときには、すゞちゃんを見たい／＼と言つておほさわぎをしてゐられた曾祖母ばあばあも、もうこちらへ来ていらつしやいました。

或日、すゞちゃんは、よち／＼とおすだれのそとへかけて出ました。あき子叔母ちゃんは、

「あら、あぶない。」と言ひながら、あわてゝおつかけていきました。すゞちゃんはもう少しでたふれるところを、ぼたりと、ぽつぽのかごにつかまりました。

「すゞ子ちゃん、こんちは、ぽつぽウ、ぽつぽウ。」と、ぽつぽがおじぎをしながら二人でかう言ひました。するとすゞちゃんはかごにつかまつたまゝ、そのまねをして、

「ぽつぽウ、ぽつぽウ。」と言ひ／＼おじぎをしました。あき子叔母ちゃんは、それを聞いて、

「おや、今のはすゞちゃんてせうか。」と、ふしぎさうな顔をして、ぽつぽに聞きました。ぽつぽはにこ／＼笑ひながら、

「え、おしまひのはすゞ子ちゃんですよ。まアおじやうずですこと。さあ、もう一ど言つてごらんさい。ぼつぽウ、ぼつぽウ。」と、言ひました。すゞちゃんはまたまねをして、

「ぼつぽウ、ぼつぽウ。」と、おじぎをしました。あき子叔母ちゃんはびつくりして、

「あら、まあ、ほ、ほ。ちよいと、すゞちゃんがぼつぽウ、ぼつぽウつて言ひましたよ。」と、思はずおほきな声でお母さまをよびました。すゞちゃんはその声にびつくりして、

「わア。」と泣き出しました。

これは、すゞちゃんが口を利いた一ばんのはじまりです。お父さまやお母さまはそれを聞いておほよろこびをしました。ぼつぽもそれはよろこんで、来る人ごとにその同じお話をしました。

すゞちゃん、あの二人のぼつぽは、こんなときからのぼつぽですよ。

お母さまは、もう先のお家のときに、すゞちゃんの生れてから今日までのことで、二人のぼつぽのしらないことは、すっかり話して聞かせました。ぼつぽは、それをみんな、お母さまにいたゞいた小さな赤いお手帳へつけておきました。二人が見てしつてゐることは、もとよりすつかりかきつけてゐます。

ですから、すゞちゃんは、大きくなつて、ごじぶんの小さなときのことからわからないときには、いつでも、ぽつぽのお手帳を見せておもらひなさい。

にやア／＼や、黒くろが来たのは、ぽつぽにくらべればずっと後のことです。にやア／＼は、すゞちゃんが、やつとはひ／＼するところに、或をぢちゃんがもつて来て下さつたのでした。黒は、たつたこなひだ、お家うちの犬になつたばかりで、もとは、そこいらののら犬だつたのです。そのつぎに、一ばんおしまひに、君きみがおもりに来たのです。

青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系 第一〇巻」ほるぷ出版

1978（昭和53）年11月30日初刷発行

底本の親本：「鈴木三重吉童話全集 第五巻」文泉堂書店

1975（昭和50）年9月

初出：「赤い鳥」赤い鳥社

1918（大正7）年7月

入力：tatsuki

校正：伊藤時也

2006年7月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ぽつぽのお手帳

鈴木三重吉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>